源平の合戦 in 鞆の浦＆能登原

備後国、鞆の浦に「平家の落人伝説」あり

地図下部にある**<u>矢の島の対岸地区が能登原（太字） 鞆の浦からは山を越えた西側</u>**

能登原の沖に丸い島が浮かんでいる。この島は「矢の島」と呼ばれている。周囲730mの小さな無人島。

今から800年ほど昔、1185 年の「屋島の合戦」で四国の屋島を追われた<u>平家の武将、能登守教経（のりつね）</u>らの一団は、燧灘（ひうちなだ）を渡り陣を鞆の浦に構えたが、<u>さらに追われて能登原へ逃れ、ここに陣を構えた。</u>

一方、源氏は軍を二手に分け一つは鞆の浦に、もう一つは田島内浦に陣を張った（那須与一の一隊）。両軍は大かがり火を焚きにらみ合いを続けた。

ある夜のこと、平氏の見張が「田島から源氏が白旗を立てて押し寄せてくる」と教経に伝えた。教経は、松に掛けていた弓を取って白旗めがけて矢を射たが、いっこうに手応えがない。暗闇の中をよくよく見ると、白旗と思っていたのは、実はかがり火に驚いて飛び立った白鷺の一群であっ

た。 教経は「富士川の二の舞であった」と笑い、一団はぐっすり眠ってしまった。その夜のこと、鞆に陣した源氏軍は能登原を攻め込み、田島からの源氏軍との挟み撃ちに合い、平家軍は総くずれとなった。ある者は腹を切り、ある者は山道を辿り、ある者は船で西海へと逃れたという。

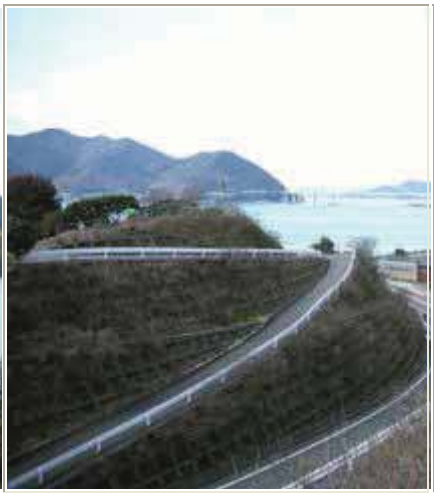
この合戦を**「能登原合戦」**と呼ぶ。

教経が弓を掛けていた松は、その後地をはうような形の巨木に成長し、「弓掛松」と呼ばれた。教経の射掛けた矢の一本が田島の小島に刺さり、やがて根をおろして竹が生い茂った。この島を「矢の島」と呼ぶようになった。

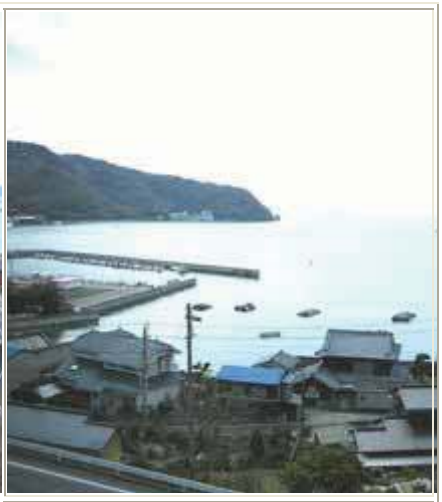
江戸時代の「西備名区」に能登原合戦として記されています。昔から白鷺が群生し、矢に用いる竹が繁殖する島と知られ、福山藩へ度々矢竹を送っていました。**田島の内浦には那須与一宗隆の陣跡を伝える那須堂**があります。**大浦の善正寺には那須与一の陣中守本尊が秘仏として安置されています。**

能登原の地名の由来は平氏能登守教経にちなむという。中山南の平家伝説と同じように能登原の平家伝説もある。能登守平教経が弓を掛けたという樹齢千年にも及ぶ黒松の根株や、能登守に由来する行事などが継承されている。毎年一月三日の能登原八幡神社で行われるお弓神事もその一つで、裃・袴姿の二人の射手が、十二間離れた標的を狙い交互に八回射って新しい年の平穏を祈念する。能登原とんどの行事も有名で、弓矢の形で美しく飾られた八メートルを越える大とんどが、各地区から一基ずつ出され、一月十四日前の日曜日、組内を練り歩いた後、一ケ所に合流し、寒風に揺れながら威勢をつける。

手前が矢の島、後ろが田島



能登原古戦場跡、西方面



同古戦場跡、南東方面

弓掛松（小学校北）

阿伏兎観音、背後に能登原

通盛神社

能登原八幡神社のお弓神事

平家蟹（かに）伝説

横倉(平家谷)の通盛神社の旧暦 8 月 13 日に行う祭礼には昔、海戦で命を落とした平家の魂が宿る「平家蟹」が、能登原の海岸からはるばるこの山をよじ登って参拝に来たとの言い伝えがある。

上の写真、能登原古戦場跡・西方面をご覧下さい。ある霊能師に霊視していただいた所、海側から山側にかけて兵士たちの霊魂が歩いている姿が見えるそうです。平家の兵士たちの魂が、平家谷の通盛神社まで行軍している姿を、カニという姿を通して、現世の私たちにメッセージを伝えているのかもしれませんね。

備後国沼隈（ぬまくま）、平家の谷伝説

沼隈と平氏との関わり

沼隈半島対岸の田島（内海町）との間に岩礁を挟んだ狭い海峡を控え、東の鞆の浦と西の尾道の中間にあたる敷名（内海大橋の下あたり）は、古くからの交通の要所で平氏の厳島信仰にともない、その寄港地となってから世に知られるようになった。「平家物語」の諸本には、治承四年（1180）三月退位後はじめて厳島に詣でた高倉上皇が、29 日夜半厳島を出帆して翌日敷名の泊まりに着き、船がかりしたまま、海岸の景色を賞したことが見える。ここには応保年間（1161～63）、後白河上皇が御幸された際に造られた御所があり、平清盛がこの御所に高倉上皇御幸のため設営させたといわれる。

このほか、、中山南の横倉は屋島の戦いで敗れ、壇ノ浦におもむく平氏の一族が、鞆から能登原に陣を移して源氏と一戦を交えたのち、隠れ住んだという伝承など平氏との関わりを想起させるものが数多く残っている。

中山南と能登原

八日谷や横倉地区は、俗称“平家谷”と呼ばれている（上地図の赤丸部）。東山間部の谷間にあって、昔から数多くの平家伝説を残している。**その昔、屋島の合戦後、平家の武将主従が隠れ住んだ地で、鎧の峠、乗り越え、刀岩、殿迫、殿方の前、喜勢、馬通し、弓場、的場など関連のある地名が数多くある。**また白色を忌み、この谷には白鳥も舞い降りず、綿を作付けした僧侶の一家は伝染病にかかり綿も実らなかったとも伝えられ、衣服も他の色に染められて着ていたようだ。

横倉には、建久三年（1192）創建の通盛神社があり、平三位越前守平通盛をまつり、後神体に通盛公自作と称する通盛・と妻小宰相の局の木座像を奉っている。通盛神社は地元では平家の宮とか、平家さんと呼ばれて、男女仲を好くする神社として親しまれている。この宮の祭には、常石や千年の海浜より平家蟹が参拝したとの伝えもある。昭和 60 年春、地元住民によって八百年祭が盛大に行われた。また約八百年の歴史をもつといわれる「はねおどり」が伝承され、勇壮な郷土芸能として県無形民俗文化財に指定されている。